

「大腸外科」

安富 正幸・武藤徹一郎・馬場 正三 編集

新潟大学医学部・第1外科

畠 山 勝 義

本邦の食生活の欧米化と人口の高齢化により、近年の日本人の疾病構造が大きく変化しており、大腸癌、大腸腺腫、結腸憩室症、炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎、Crohn 病）、虚血性腸炎などの腸疾患が著しく増加している。欧米ではこのような疾患が以前より多かったため、Colon and Rectal Surgery, Surgery of the Colon Rectum and Anus などの腸外科の専門書は既にいくつか出版されていたが、わが国にはこのような腸外科の専門書はいまだなく、長い間渴望されていた。ちょうどこの度、安富正幸、武藤徹一郎、馬場正三の3氏の編集による「大腸外科」が1999年8月1日に医学書院より出版された。本書は基本的な腸管の解剖・生理から多様な腸疾患の最新情報まで網羅した腸外科の専門書であるとともに、最近の内視鏡、超音波、注腸造影 X 線検査、CT、MRI などの診断技術の進歩に加えて、薬物治療や内科的治療までも含めて実地臨床家の役に立つように配慮されている。

その内容を少し紹介してみると、

第1章「大腸手術のための局所解剖」では、大腸の脈管・神経系の解剖や手術に必要な局所解剖が掲載され、第2章「大腸の生理機能」では、腸管の運動、大腸の生理機能、直腸肛門機能（排便調節機構）、腸内細菌叢、消化管ホルモンと免疫などが述べられている。第3章「大腸疾患の画像診断法」では、最新の大腸内視鏡、超音波、注腸造影 X 線検査、CT、MRI など、第4章「大腸外科に必要なその他の検査法」では、直腸・肛門の生理学的検査や生検組織検査などが述べられている。第5章「周術期管理と術後のケア」では、救急処置、周術期の管理、ストーマ管理が具体的に述べられている。第6章からは各論となり第12章まで、炎症性腸疾患、大腸ポリープとポリポシス、大腸癌、その他の大腸腫瘍、腸管閉塞、肛門疾患（性的感染症を含む）、その他の大腸肛門疾患と続く。第13章では、近年の治療上の大きな進歩である、腹腔鏡下手術や内視鏡的手術について述べられている。また、第14章では、大腸切除標本の取り扱い方が詳しく記載され

ている。本書の特徴であると思われるのは、最後の15章で大腸外科を巡る最近のトピックスが取り上げられていることであろう。これには、表面型大腸腫瘍、遺伝性非ポリポシス大腸癌、大腸癌における癌遺伝子・癌抑制遺伝子、大腸癌手術とQOL、IBD (inflammatory bowel disease) とサイトカイン、MOF (multiple organ failure) と SIRS (systemic inflammatory response syndrome) が挙げられており、それぞれ最近の研究の進歩や成果などが述べられている。以上の内容はそれぞれその分野の専門家による分担執筆となっている。

このような内容から、消化器外科、特に腸外科を専攻しようとしている外科医または既に腸外科を専攻している外科医の方々、あるいは腸外科の専門医を目指す方の座右の書としてお勧めしたい。

● B5 頁424 図190 写真120
カラー写真161 表118 1999 定価
(本体20,000円＋税) 円400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)